

フランス語における内包解釈の 不定名詞句 UN N について

——非特定解釈との比較による一考察——*

長 沼 圭 一

1. はじめに

拙論（2014）においては、フランス語における非特定解釈の不定名詞句 UN N について、総称文に現れる不定名詞句 UN N との比較から考察を行った。本稿においては、この非特定解釈の不定名詞句 UN N と関連した別の解釈の不定名詞句 UN N について考察を行う。

稲葉（2010）によると、直接目的補語に現れる UN N には、特定解釈、非特定解釈の他に、内包解釈が存在するという。以下では、この内包解釈の UN N について論じる。

2. UN N の内包解釈

内包解釈に言及する前に、まず UN N の特定解釈と非特定解釈について簡単に触れておく。

稲葉（2010）はフランス語の不定名詞句 UN N の特定解釈と非特定解釈を次のような例とともに説明している。

1. 特定解釈

(a) Ce matin, *un avion* s'est écrasé dans la mer.¹⁾

「今朝、飛行機（*un avion*）が海に墜落した。」

2. 非特定解釈

(b) Pierre voudrait acheter *un stylo*. Il va en acheter un demain.

「Pierre（ピエール）は万年筆（*un stylo*）を買いたい。彼は明日一本買うだろう。」

〔中略〕

(a) の un avion は、今朝海に墜落した飛行機であるという限定が生じるため特定解釈になる。(b) では Pierre は万年筆 (un stylo) を買いたいと思っているが、その万年筆がまだ決定されていないため非特定解釈なる。(ibid., pp. 11-12)

また、稲葉 (2010) は、特定解釈と非特定解釈の間には、前提となるパラダイムの違いが存在することを指摘している。

(1) Paul veut une bicyclette. (KLEIBER, 1981, p. 219)

(1) における une bicyclette には特定解釈と非特定解釈の両方の可能性があるがこれについて稲葉 (2010) は以下のように述べている。

(83) [= (1)] では、Paul が欲している対象の概念 = bicyclette (自転車) は限定されている。したがって、ここでは特定の une certaine bicyclette (ある特定の自転車) なのか、非特定の une bicyclette quelconque (何らかの自転車) なのかという点が問題となる。

(83) [= (1)] において、Paul は自転車を欲していて、その自転車は特に限定されておらず、自転車であれば何でもよいならば、それは une bicyclette quelconque であり、すなわち非特定解釈である。この非特定解釈の場合は、上記のように、概念を問題にしていると考えてもよい。すなわち、Paul が欲しいものは voiture (自動車) や moto (オートバイ) ではなく、bicyclette (自転車) であるという場合である。反対に、Paul が欲しい自転車が、○○○メーカーの×××型と、具体的に決まっている場合、それは une certaine bicyclette と、特定解釈になる。すなわち、Paul が欲しいのは A という型の自転車であって、B や C という型ではないということである。これらを図式化すると以下のようになる。

【特定解釈の場合】

$$(84) \text{ Paul veut une } \left\{ \begin{array}{l} \text{bicyclette 1} \\ \text{bicyclette 2} \\ \text{bicyclette 3} \end{array} \right\} .$$

【非特定解釈の場合】

- (85) Paul veut une $\left. \begin{array}{l} \text{voiture} \\ \text{bicyclette} \\ \text{moto} \end{array} \right\}$.
- (*ibid.*, pp. 47–48)

一方で、稲葉 (2010) は、これらの特定解釈、非特定解釈と区別して、内包解釈というものを立てている。

- (2) Marie : Je veux un enfant. Pendant que t'étais pas là, j'ai pensé qu'à ça.
(*Amoureuse*, 1993年4月号, p. 84, cité dans 稲葉, 2010, p. 38)

稲葉 (2010) は、(2) について以下のように述べている。

(72) [= (2)] では、un enfant (子供) は、発話時点においてまだ実在しない対象である。このような場合、どのような解釈を行えばいいのだろうか。たとえば、養子団組〔原文ママ〕で既に実在する子供の中から1人の子供が欲しいという場合、既にその子供が決まっていれば特定解釈になり、決まっていなければ非特定解釈になる。先行研究で定義されている非特定解釈は、述語的観点からも、話し手の知識に依拠する観点からも、その存在は既にあるものとして捉えられている。しかし、自分自身が出産する子供のように、発話時点ではまだ存在しない対象であるため名詞レベルの限定しか行えないが、しかし、将来的には必ず特定な対象になるのである。言い換えれば、発話時点では外延と結びつかないため指示性はなく、しかし、名詞概念そのものを問題としているわけではない。そこで、本論ではこのような un N の解釈を内包解釈と呼ぶことにする。(*ibid.*, p. 43)

稲葉 (2010) は、次の例における une bosse も内包解釈であると指摘している。

- (3) Le facteur, en passant devant, prend une bosse brusquement. (GIDE, *La porte étroite*, p. 15, cité dans 稲葉, 2010, p. 43)

また、稲葉（2010）は、非特定解釈と内包解釈の違いを以下のように説明している。

非特定解釈：un N の対象が発話時点において既に現実中存在し、その中のどれでもいいから1つのN、すなわち、*n'importe quel N, un N quelconque* の意味で用いられている場合、un N を非特定解釈とする。

内包解釈：un N の対象が発話時点においてはまだ現実中存在せず、発話時点においてun N はN の名詞概念のみを限定する。そして時間の経過とともに現実中存在するようになり、その時には特定のなものになるun N を内包解釈とする。
(*ibid.*, p. 44)

果たして、非特定解釈と内包解釈は別のものとして区別すべきものなのであろうか。内包解釈とは一体どのような性質のものであろうか。以下では内包解釈についてさらに詳しく考察を行い、非特定解釈との比較を行うことにする。

3. 非特定解釈のUN N と内包解釈のUN N

稲葉（2010）は、非特定解釈について、「un N の対象が発話時点において既に現実中存在」するとしているが、一見するとこれは特定解釈の特徴のように思われる。たとえば、

(4) Paul veut une bicyclette. [= (1)]

(4) の *une bicyclette*（自転車）は、聞き手こそ知らないが、Paul が欲しいと思っている自転車が既に存在している場合には特定解釈となり、Paul が欲しいと思っている自転車が具体的に存在していない場合には非特定解釈になると考えられる。であるならば、稲葉（2010）が非特定解釈について存在すると主張しているものは一体何であらうか。これについては、内包解釈から見ることによって明らかになるであらう。

稲葉（2010）は、内包解釈については、「un N の対象が発話時点におい

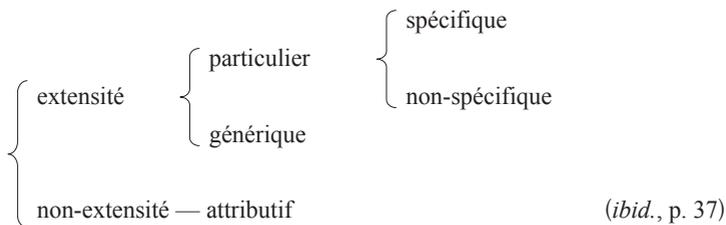
てはまだ現実に存在せず、発話時点において un N は N の名詞概念のみを限定する」としている。稲葉（2010）が内包解釈の例として挙げている例を見てみよう。

- (5) Marie : Je veux un enfant. Pendant que t'étais pas là, j'ai pensé qu'à ça.
 [= (2)]

確かに、(5)において、Marie が欲しいと言っている un enfant（子供）はこれから作られるものであって、少なくとも発話時点においては存在していない。一方、(4)における une bicyclette（自転車）は、たとえ非特定解釈であっても、Paul が将来手に入れるかもしれない自転車は、発話時点において既に製造され存在している可能性がある。少なくとも、Paul が自転車が欲しいと発話している時点において、Paul が任意の自転車を選び出すことができる自転車の集合は間違いなく存在している。したがって、稲葉（2010）が非特定解釈において存在すると主張しているものは、厳密には、「任意の個体を抽出することができる現実レベルでの N の集合」であると言えるであろう。

しかしながら、ここで新たな疑問が浮かび上がる。果たして、不定名詞句 UN N が非特定解釈であると認められるためには、このような選択肢となる集合の存在が必要条件となるのであろうか。少なくとも筆者の知る限りでは、このようなことを主張している先行研究は思い当たらない。

ここで、古川（1978）が示している不定名詞句の分類の図を見ることにする。



この図から言えることは、UN N が個別的な (particulier) ものを表している場合、それは特定の (spécifique) か非特定の (non-spécifique) かのど

ちらかに分類されるということである。(5)において un enfant は個別的なものであるが、既に決まっている特定の un enfant ではありえない。このように考えると、(5)の un enfant は必然的に非特定解釈ということになる。また、統辞的操作によっても非特定解釈と同じ振る舞いが示される。

- (6) Jean veut attraper un poisson. Il l'attrapera demain. (FURUKAWA, 1986, p. 159)
- (7) Jean veut attraper un poisson. Il en attrapera un demain. (*ibid.*)

FURUKAWA (1986) は、(6), (7)において共通している前半の文 Jean veut attraper un poisson. の un poisson の解釈はあいまいであるが、代名詞化によって解釈の区別ができることを指摘している。すなわち、(6)のように人称代名詞 *le* によって置き換えられた場合は特定解釈となり、(7)のように中性代名詞 *en* によって置き換えられた場合は非特定解釈となるということである。この操作を(5)に適用した場合、次のようになると考えられる。

- (8) Je veux un enfant. Un jour, j'en aurai un.

すなわち、(8)のように、ここで適当とされる代名詞は中性代名詞 *en* であり、非特定解釈の場合と同じ結果が得られるのである。

このことから、稲葉 (2010) が内包解釈と呼んでいるものは、非特定解釈の一種であると言えるであろう。では、なぜ稲葉 (2010) は内包解釈を非特定解釈から区別しているのだろうか。

4. 譲渡不可能性

ここで、非特定解釈、内包解釈として挙げられている例をもう一度観察してみることとする。

- (9) Paul veut une bicyclette. [= (1), (4)]
- (10) Jean veut attraper un poisson. (FURUKAWA, 1986, p. 158)
- (11) Marie : Je veux un enfant. Pendant que t'étais pas là, j'ai pensé qu'à ça. [= (2), (5)]

(12) Le facteur, en passant devant, prend une bosse brusquement. [= (3)]

(9), (10) は非特定解釈、(11), (12) は内包解釈の UN N が含まれている。稲葉 (2010) がこの2つの解釈の違いとして説明していたのが、発話時点で指示対象が存在するか否かという点であった。既に上述したように、これは正確に言えば、非特定解釈の場合は UN N が抽出されるべき集合が存在しているのに対し、内包解釈の場合はこのような集合が想定されないという点であると考えられる。では、なぜ集合が想定されないのであろうか。それは、非特定解釈においては個体を「抽出」することが問題となるのに対し、内包解釈においては個体を「創出」することが問題となるからであろう。すなわち、(9) においては店で売っている自転車のうち一台を選び出して手に入れば Paul の欲望は満たされ、(10) においては海や川にいる魚のうちの一匹を釣り上げれば Jean の欲望は満たされるのに対し、(11) においては Marie がまだ存在していない子供を産むこと、(12) においては郵便配達員に元々存在していないこぶができることが問題となっているのである。

また、(9) において Paul が手に入れた自転車、(10) において Jean が釣り上げた魚は、他人に譲渡することが可能である。一方、(11) において誕生した親族関係、(12) においてできた身体の一部は、性質上他人に譲渡することができないものとして解釈される。すなわち、内包解釈の UN N には譲渡不可能性 (inaliénabilité)²⁾ という性質が備わっていると考えられるのである。(11) において Marie から産まれてくる子供は Marie の子供であり、(12) において郵便配達員にできるこぶは郵便配達員のこぶである。このような関係が結ばれることは運命的に不可避なことであり、その意味においては UN N で表される指示対象が創出される以前から限定されていると言える。

いずれにせよ、非特定解釈が集合からの「抽出」を含意するため外延の存在が問題となるのに対し、内包解釈においては、UN N は「創出」されるものであり、現実世界における外延の存在は発話時点では問題とならない。このことから、このタイプの UN N は内包の記述機能の方が前面に出ているため、内包解釈という名称は当を得ていると言えるであろう。

しかしながら、いかなる名詞も必然的に内包を記述する機能を持っている。これこそが名詞の本質的機能であり、いかなる UN N も名詞 N の内

包を記述している。その意味では、全ての UN N が内包解釈を含んでいると言えるかもしれない。一方、UN N が特定解釈か非特定解釈かという問題は、語用論に属するものであり、決して UN N そのものに含意されているものではない。したがって、内包解釈と特定・非特定解釈はレベルの違うものであり、互いに対立するものではなく、両立しうるものであると考えられる。すなわち、内包解釈とは、UN N の外延の存在前提のない非特定解釈のことであり、非特定解釈の一種に過ぎないと言えることができるのである。

5. 実例分析

ここで、内包解釈の実例を観察することにする。動詞 *vouloir* の直接目的補語として現れている非特定解釈の UN N のうち N の集合の存在を前提としないものを内包解釈の UN N として Frantext から 37 の例を収集した。それらは大きく分けて 3 つのグループに分類することができる。1 つめは、名詞 N が行為を表しているタイプ、2 つめは、形容詞等の修飾語句を伴い、名詞 N が置かれることが望ましい状態を表しているタイプ、そして 3 つめはこれまで見てきた例と同様に名詞 N が譲渡不可能な人や物を表している場合である。

5.1. 名詞句が行為を表している場合

動詞 *vouloir* の直接目的補語として現れる UN N が、何らかの行為を表している例は 12 例見られた。

- (13) Un buffet permet de faire connaissance, de nouer des liens entre les deux familles, leurs amis et relations. *Je veux un pique-nique*, avait-elle décrété. Elle avait elle-même choisi le traiteur, un des meilleurs, exigé des tentes, c'est très gai, un petit camp rustique à toits pointus. (GARAT, A.-M., *Pense à demain*, 2010, p. 126, Frantext)
- (14) Revenons à ce mois de septembre lorsqu'en appel on ramena notre peine à quatre mois avec sursis. Les magistrats du tribunal d'appel n'avaient plus très envie d'aggraver les verdicts, ni la mairie qui désirait la tranquillité, *ni même la préfecture qui voulait une rentrée calme*. Je suppute aussi que les

liens de Georges Buis, le père adoptif de Pierre et mon beau-père, avec l'establishment gaulliste, avaient adouci l'ardeur des poursuites policières. (BRIÈRE-BLANCHET, Cl., *Voyage au bout de la révolution : de Pékin à Sochaux*, 2009, p. 158, Frantext)

- (15) Un petit jeune homme, de type loubard, joli mais dangereux me suit rue Sainte-Anne. Il me parle de mon cul qu'il trouve excitant. Je lui dis que je n'ai pas d'argent. Il me dit que ce n'est pas le problème. Je lui explique même que je n'ai pas un sou sur moi pour éviter qu'il m'agresse dans un coin sombre. Ce n'est vraiment pas son souci affirme-t-il. *Il veut un baiser*, c'est tout, pour le plaisir. Il me baise superbement, magnifiquement (quel vocabulaire) dans l'escalier d'un immeuble. (LAGARCE, J.-L., *Journal 1977-1990*, 2007, p. 313, Frantext)

例えば、(14) は以下のように書き換えることが可能であろう。

- (14') [...] *ni même la préfecture qui voulait rentrer calmement*. [...]

このグループに属する例は、UN N がイベントを表しているため、自転車のような具体物を欲する場合とは異なり、集合の中から選び出すことはできない。このような例に不定名詞句が現れているのは、イベントの一回一回の生起を一つのまとまりと捉えているからであろう。

5.2. 名詞句が状態を表している場合

動詞 *vouloir* の直接目的補語として現れる UN N が形容詞等の修飾語句を伴い、N が形容詞等の修飾語句によって表されている状態になることが望まれていると解釈できる例は11例見られた。

- (16) J'ai aussi l'illusion de pouvoir me pétrir à l'envi, même si je refuse que la sculpture prenne. M'établir comme une personne définitive, m'en tenir à une seule identité, ne m'intéresse absolument pas. M'achever ? Non merci, je préfère vivre. Refusant de choisir entre tous mes possibles, *je veux une vie aussi variée qu'imprévisible* comme en mènent les personnages de film. Je veux tout connaître de la condition humaine, ayant en horreur la

contrainte. (ARNAUD, Cl., *Qu'as-tu fait de tes frères ?*, 2010, p. 159, Frantext)

- (17) — Cet arbre est un fayard, dit mon ami, tapotant le tronc comme un flanc d'animal ami. Le hêtre est rare en ces régions méridionales. *Il veut une atmosphère humide*, mais craint l'excès d'eau, la chaleur comme le froid. A cette altitude de Montepulciano, il doit bien se plaire pour être aussi brave et fort. (GARAT, A.-M., *Hongrie : blason*, 2009, p. 33, Frantext)
- (18) Pour nous qui demeurons hantés par le souvenir de nos proches, disparus en fumée, demeurés sans sépulture, pour *tous ceux qui veulent un monde meilleur*, plus juste et plus fraternel, débarrassé du poison de l'antisémitisme, du racisme et de la haine, ces murs résonneront désormais et à jamais de l'écho de vos voix, vous les Justes de France qui nous donnez des raisons d'espérer. (VEIL, S., *Une vie*, 2007, p. 386, Frantext)

例えば、(17) は以下のように書き換えることが可能であろう。

(17') [...] *Il veut que l'atmosphère soit humide*, [...]

すなわち、このグループに属する表現は、不定名詞句が用いられているが、欲せられているのは、不特定の UN N そのものではなく、既に存在している特定の N の状態変化というイベントであると考えられるのである。

5.3. 名詞句が人や物を表している場合

動詞 *vouloir* の直接目的補語として現れる UN N が、譲渡不可能な人や物を表している例は14例見られた。ほとんどが親族名称にかかわる名詞句であり、*un enfant* が9例、*un garçon* が2例、*une famille* が1例であった。

- (19) Je suis devenue complètement idiote. Je répétais : « J'ai trouvé mon maître ! J'ai trouvé mon maître ! » Au printemps suivant, *j'ai voulu un enfant*. C'était probablement un peu tôt mais j'y tenais beaucoup. Je devais me dire que ce serait une façon de resserrer tous les liens. (GAVALDA, A., *La Consolante*, 2008, p. 461, Frantext)
- (20) Ce que j'aime surtout en elles, c'est qu'elles soient mes filles. J'ai écrit jadis

qu'à la naissance, à l'hôpital Beth Israel de Boston, de ma fille aînée, j'ai fait une drôle de gueule, *car je voulais un garçon*. C'est une réaction superficielle. Au fond de moi, j'ai toujours aspiré au Féminin dans ma quête sentimentale. Je suis heureux de n'avoir pas eu de fils. (DOUBROVSKY, S., *Un homme de passage*, 2011, p. 237, Frantext)

- (21) Nous étions très différentes pourtant. Comme dans les romans de Jane Austen, vous savez ... La grande sensible et la petite sensitive ... Elle était ma Jane et mon Elinor, elle était calme, j'étais turbulente. Elle était douce, j'étais pénible. *Elle voulait une famille*, je voulais des missions. Elle attendait des enfants, j'attendais des visas. Elle était généreuse, j'étais ambitieuse. Elle écoutait les gens. Moi, jamais ... (GAVALDA, A., *La Consolante*, 2008, p. 419, Frantext)

親族名称以外では、次の例に見られる病気のような身体に苦痛を与える表現が見られた。

- (22) Son sommeil torpide. Ce n'était pas István, ce cadavre ignoble. Il n'avait pas été un frère, un enfant au bord de la lagune. Il était un ennemi sans identité, ses dents étaient gâtées. *Il leur voulait un mal sans nom*. Il ne leur voulait pas de mal, il était le mal, une incarnation ordinaire qui va par les rues, son flot est intarissable. (GARAT, A.-M., *L'enfant des ténèbres*, 2008, p. 464, Frantext)

親族名称や身体への苦痛は名詞そのものの性質上譲渡不可能であるが、次の例では名詞そのものは譲渡可能なものというわけではない。

- (23) Lui seul, fort de ses relations, transformait l'entreprise traditionnelle en grand groupe industriel, changement d'envergure si brutal que l'installation à Choisy défrayait la chronique. D'abord la construction, confiée aux frères Perret, adeptes du béton : ils venaient de construire le Théâtre des Champs-Élysées dans ce matériau moderne, et *Lewenthal voulait une usine à l'image du futur*. Ensuite, multipliant le capital, il absorbait une marque de chocolats belges et un importateur de café qui périlclitaient. (GARAT, A.-M., *L'enfant*

des ténèbres, 2008, p. 120, Frantext)

(23) で問題となる *usine* (工場) は、既存の工場からの選択ではなく、自分の力で作り上げるものとして理解される。無論、工場を他人に譲渡することは可能であるが、作り上げる前から設立者と工場の関係が運命的に決まっている点において、親族名称と近い性質を持っていると言える。

また、このグループに属する不定名詞句 UN N は、その物理的な存在そのものが問題になっているわけではない。子供は出産というイベントによって得られるものであり、病気も感染や発症というイベントを通じて現れるものである。(23) の工場も同様に、設立というイベントを通じてその所有者となるのである。すなわち、ここで重要なのは UN N が存在するに至るまでの過程なのである。

以上、内包解釈の UN N を 3 つのグループに分けたが、これらはすべてイベントという共通の概念に集約されると考えられる。

6. 現働世界と潜在世界

最後に、内包解釈の UN N を不特定解釈の UN N と統一的に捉える方法を考察してみることにする。

FURUKAWA (1986) は、様態動詞とともに用いられている un N は特定か不特定かの解釈があいまいであることを指摘している。

(24) *Jean veut attraper un poisson.* [= (10)]

(24) における不定名詞句の特定、非特定の解釈の区別と時点との関係について、FURUKAWA (1986) は以下のような表を挙げている。

(A)

moment lecture	t_n	t_0	t_n
spécifique		spécificité	
non spécifique		non-spécificité	spécificité

(*ibid.*, p. 162)

すなわち、(24) のように動詞が現在形に置かれている文に関しては、un poisson が特定解釈の場合、発話時点 t_0 において既に特定であるが、un poisson が非特定解釈の場合は、発話時点 t_0 において非特定であっても、未来の時点 t_n においては特定の解釈されることになるということである。

この表を稲葉 (2010) が指摘する内包解釈にも応用してみることにする。

(25) Marie : Je veux un enfant. Pendant que t'étais pas là, j'ai pensé qu'à ça. [= (2), (5), (11)]

(25) の解釈があくまでも Marie が自分で子供を産みたいという解釈である場合でも、稲葉 (2010) は子供が未来において特定のなものとして存在するとしているため、内包解釈の場合にも表 A の不特定解釈の部分が当てはまることになる。しかしながら、(25) の un enfant に特定性を付与するのは果たして時間の経過なのであろうか。無論そのように解釈して齟齬が生じると断言できるわけではないが、ここで関与的なのは時間軸よりもむしろ現実世界か仮想世界かの区別であるように思われる。表 A を応用すると、以下のように示すことができるであろう。

(B)

	univers	actuel	virtuel
lecture			
	spécifique	spécificité	
	intentionnel	non-spécificité	spécificité

すなわち、特定解釈の場合、現働世界 (univers actuel) において特定性が保証されているが、内包解釈の場合、現働世界における特定性は保証されておらず、特定のでありうるのは潜在世界 (univers virtuel) においてであると考えられるのである。さらに、このことは内包解釈だけでなく、非特定解釈にも当てはまることであると考えられる。すなわち、(24) においてこれから魚をとることができるかどうかは不確かなことであり、発話時点において魚の特定性が関与するのは、「魚を手に入れている未来」という潜在世界においてなのである。したがって、表 B は表 C のように改めるこ

とができるであろう。

(C)

	univers	actuel	virtuel
lecture			
	spécifique	spécificité	
	non-spécifique	non-spécificité	spécificité

以上のように、内包解釈は非特定解釈と統一的なメカニズムによって説明することができるものであり、非特定解釈の一部を成すものであると捉えるのが妥当であると考えられる。

7. おわりに

本稿では、稲葉（2010）において内包解釈と呼ばれている UN N について考察を行った。稲葉（2010）は直接目的補語の位置に現れる UN N について、特定解釈、非特定解釈と対立する第3の解釈として内包解釈を挙げている。確かに、任意の個体を抽出することができる現実レベルでの N の集合の存在前提があるか否かという点において、非特定解釈と内包解釈の間に違いを見ることはできるが、通常は特定解釈でないものを非特定解釈と捉えるのが一般的であり、また非特定解釈と内包解釈の間に統辞的な振る舞いの違いが見られないことから考えて、内包解釈は非特定解釈の一種であると捉えることが妥当であると言える。しかしながら、非特定解釈と内包解釈をよく観察してみると、内包解釈の方には UN N が譲渡不可能な性質を持つという特徴が見られる。さらに、内包解釈の UN N の例を収集し分析してみると、UN N が行為を表しているタイプ、UN N が状態を表しているタイプ、UN N が人や物を表しているタイプの3つに分類することができるが、すべてイベントという概念に集約すると考えられ、UN N が安定した存在と結びついていないことが分かる。また、FURUKAWA（1986）は非特定解釈の UN N に関して、発話時点では非特定のであっても未来の時点において特定のなりうることを指摘しているが、これを時間軸ではなく談話世界の変化として置き換え、現働世界において非特定のであるものが潜在世界においては特定のになると捉え直すことにより、非

特定解釈も内包解釈も共通の一つのメカニズムによって説明することが可能となる。以上のことから、内包解釈は一般的な非特定解釈とは異なる側面も持つものの、基本的には非特定解釈との共通点が多く、非特定解釈の中に含まれるものであると考えることができる。

注

- * 本研究は JSPS 科研費23520515 の助成を受けたものである。
- 1) 本稿では直接目的補語として現れる UN N のみを扱うが、この例のように特定解釈の UN N は主語位置に現れることもある。
 - 2) VERGNAUD & ZUBIZARRETA (1992) は、身体部位、衣服、親族名称、図像名詞、さらに、computer や car といった名詞が拡張的に譲渡不可能な名詞として機能することを指摘している (cf. p. 597)。

参考文献

- 稲葉梨恵 (2010) : 『フランス語における照応形式の機能的研究』, 筑波大学博士 (言語学) 学位請求論文。
- 長沼圭一 (2014) : 「フランス語における非特定の解釈の不定名詞句 UN N について—総称的解釈との比較による一考察—」, 『愛知県立大学外国語学部紀要 (言語・文学編)』, 46, pp. 181-194.
- 古川直世 (1978) : 「フランス語における総称名詞句の特性」, 『文藝言語研究 言語編』, 3, 筑波大学文芸・言語学系, pp. 31-51.
- FURUKAWA, N. (1986) : *L'article et le problème de la référence en français*, France Tosho, Tokyo.
- KLEIBER, G. (1981) : « Relatives spécifiantes et relatives non spécifiantes », *Le français moderne*, 49-3, pp. 216-233.
- VERGNAUD, J.-R. & ZUBIZARRETA, M. L. (1992) : « The Definite Determiner and the Inalienable Constructions in French and in English », *Linguistic Inquiry*, 23-4, pp. 595-652.

Le syntagme nominal UN N à lecture intensionnelle en français —comparaison avec la lecture non-spécifique—

Keiichi NAGANUMA

INABA (2010) définit l'emploi du syntagme nominal *un enfant* dans la phrase *je veux un enfant* comme la lecture intensionnelle en le distinguant de la lecture non-spécifique du syntagme nominal *une bicyclette* dans la phrase *Paul veut une bicyclette* ; quelle que soit la bicyclette que Paul veut, elle peut être déjà fabriquée tandis que l'enfant que je veux n'existe jamais encore.

C'est vrai qu'il y a une différence entre la lecture non-spécifique et la lecture intensionnelle sur le point où la première présuppose au niveau actuel l'existence de l'ensemble duquel s'extrait un individu quelconque tandis que ce n'est pas le cas pour la seconde, mais en général la lecture qui n'est pas spécifique appartient toujours à la lecture non-spécifique et il n'y a pas de différence au point de vue syntactique entre la lecture non-spécifique et la lecture intensionnelle, donc il serait raisonnable de penser que la seconde est une variation de la première.

Cependant, si les deux lectures s'observent de plus près, il apparaît que seule la lecture intensionnelle a la caractéristique de l'inaliénabilité. En collectant et analysant des exemples de syntagmes nominaux UN N à lecture intensionnelle, il se révèle qu'ils peuvent se classer en trois types : celui dont le syntagme UN N représente une action, celui dont il représente un état et celui dont il représente une personne ou une chose inaliénable. Les trois types ont pour dénominateur commun de concerner la notion d'évènement.